

Title	<批評・紹介>東亞史研究(蒙古篇) 和田清著
Author(s)	萩原, 淳平
Citation	東洋史研究 (1959), 18(2): 220-222
Issue Date	1959-10-01
URL	https://doi.org/10.14989/148140
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

東亞史研究（蒙古篇）（東洋文庫論叢第四十二）

和田 清著

昭和三十四年三月 東洋文庫發行

A 5版 九三八頁 圖版五葉 索引

清代蒙古地圖一葉

本書は、さきに著者が東洋文庫論叢第三十七として發表された「東亞史研究」（滿洲篇）の姉妹篇にあたる。序文によれば、著者は大正四年（1915）卒業論文に「清初の蒙古経略」を研究され、同六年には、「内蒙古諸部落の起源」（目黒書店）を公にされた。本書はそれ以來四十餘年にわたるためまざる研究の成果で、未發表二篇を含む論文集である。

御承知のように、和田博士の研究領域は、蒙古・滿洲を始め中國に關するものも少くなく、地域的に廣いばかりでなく、時間的にも長いのであるが、なかでも明代蒙古に關する研究は卒業論文以來もつとも多く、やはり博士の最も主力をそそがれた領域ではないかと推察される。そして、これらの論文はすでに多くの専門雜誌などに發表されてはいるが、今日ではなかなか入手しにくいものもあり、後學のものとしては研究に困難を感じていたのであるが、今回一書にまとめられたことは、誠に學界のために喜ばしいところである。

がんらい、明代の蒙古はともすれば元代の華やかな蒙古人の活躍のかけにかくれて、等閑にふされ勝ちなものである。元代の蒙古人は、言うまでもなく世界的なスケールにおいて活躍し、その研究も東洋史の中にあつて、最も高い水準に達している。しかし、これら

はヨーロッパへの遠征とか中國支配に重點が向けられ、そのエネルギー源になつた草原の遊牧社會については、かえつて少ないのではなからうか。しかるに明代二百數十年間の蒙古歴史は目立たぬ存在ではあるが、遊牧民族の實態を知るには史料も豊富で最も適した時代と言える。ただその史料は、蒙古側の「蒙古源流」や中國側の明實録を始めとする數多くの史料が、互に錯雜していて地名・人名一つを取つて見てもなかなか決定しかねるほど困難なものである。博士はこれらをシュミットの言語學的研究所を参照しつつ明代蒙古に關する多くの重要な史料を殆んど網羅して、それを縦横に驅使しながら徹底的に分析解明に努力せられた。その結果ここに明代蒙古の基礎研究が完成されたのである。

まず本書の目次をあげれば、

- 一、明初の蒙古経略
- 二、兀良哈三衛の本據について
- 三、兀良哈三衛に關する研究 上
- 四、兀良哈三衛に關する研究 下
- 五、達延汗について
- 六、察哈爾部の變遷
- 七、中三邊及び西三邊の王公について
- 八、俺答汗の覇業
- 九、明代の北邊防備
- 一〇、北元の帝系について
- 一一、擴廓帖木兒の死について
- 一二、七克力考
- 一三、正統九年の兀良哈征伐について

一四、明末清初に於ける蒙古族の西征

一五、土默特趙城の戦について

一六、豊州天徳軍の位置について

一七、革書偽作考

以上の一七篇である。このうち一―八までは明代蒙古の通史をなしており、更に前半の一―四は、博士がかつて滿鐵の「滿鮮地理歴史研究報告」に執筆されたものであり、「内蒙古諸部落の起源」の前編にあたる。後半の五―八は、「内蒙古諸部落の起源」の改訂増補版とも言ふべきものである。九―一七は、通史を補う特殊研究である。これらを見れば、明代蒙古の重要なことは殆んど網羅されている。従つて明代の蒙古を研究する場合にはまず本書から出發しなければならぬ。と同時に現在においては本書から出發すれば、ほぼ誤りないと云つても過言ではなからう。

ただ個々の研究題目については、筆者としては必ずしも賛成しかねる個所がないわけではない。たとえば、たまたま同じ頃印刷になつた筆者の「小王子に關する一考察」(東洋史研究第十七卷第四號)も博士とは異なつた解釋としての一試論であつて、小王子とイスマイルの關係は博士が云われるように兩者が戦鬪を交えたのではなく、戦略上で分れたこと、ひいては小王子とオイラートの關係も對立ではなく、イスマイルの行動を通して同盟に向つた點を實録の諸記録から述べてみた。また、博士が本書の中で最も力を注がれた問題の一つと思われる「達延汗について」も、「内蒙古諸部落の起源」においては、二人の達延汗とされていたのを、一人に改められている。なるほど達延汗はナゾの人物であるが、私としては明側の記録に従つて二人に分けた方が妥當であると思われる。したがつて、博

士が源流の説を批判され、「成化六年以降嘉靖二十二年に至る七十四年の長期間であつたとは到底思われず、實はその半ばにも等しい成化十七・八年乃至嘉靖十一・二年までの五十餘年間に過ぎなかつたのである」と述べておられるが、筆者の見解によれば、成化二十三年以降正徳十三年ごろまでの三十年餘に過ぎないと考えられる。これらの疑點については何かの機會に詳しく發表して御批判をあそぎたいと思つている。

そのほか、いささか氣になるのは、處々に引用されている明實録の引用記事で語句の外に月日などで疑點がある。例えば四三五頁十二行目に十九年六月とあり、同じく十四行目に翌七月とあるが、私の調べた所では、七月(丙辰)・八月(乙亥)の方がよいように思われる。御承知のように明實録は鈔本が幾通りもあり、相互に異同がはげしいので何れの鈔本によつたか記していただけたら研究に便利であろうと考えられる。また、實録の記事の取扱についても、四三九頁三行目に瓦剌酋長克失の記事が掲げられているが、この記事は以下略の部分にこの報告の誤りであることが指摘されているので此處に引用するのは不適當かと思われる。このように本書の偉大な成果のなかにも、詳細に検討してみればまだ補足修正すべき點がいくつあるように思われる。

そのほか、博士が序文でも觸れておられるように、明代蒙古と關係の深い新疆及び青海・西藏などの研究が本書と關聯しつつ今後行われるべきであり、また中國との交渉も一層加えらるべきであろう。明の經世文編を見ても、そのうち三分の一乃至それ以上が北方政策である。このことは明代中國史研究に北方が重要な意義を持つとともに、北方史にあつても明の北方政策によつて規制される所が多い